

# CONTENTS

巻頭エッセイ「市民活動をサポート！」 P1

## 仲間と広げる 活動と活用の輪

株式会社コクヨ工業滋賀 開発グループ  
田中 沙季さん

おうみ未来塾リレーエッセイ P2

## 楽しみながらの活動はひとがあつまる

おうみ未来塾 第15期生「ござっと!」  
「下川町地域おこし協力隊」細江美和子さん

特集●未来に向かってつなげる、つづける。 P2~5

## 分かちあえる手段。

## シェアしながら仕事を育てる

「サンキューファインホース夢プロジェクト」  
がみせてくれたもの

市民と企業のChangeにチャレンジ! P6~7

- 特定非営利活動法人滋賀自閉症研究会たんぼぼ
- 特定非営利活動法人BRAH=art.
- 循環型未来食堂 みんなの食堂
- HOTEL講大津百町

Changeにチャレンジ! 応援BOX P8

滋賀でサステナブル社会をめざす市民情報交流誌  
Collaboration Paper for Voluntary Network in Ohmi



# おうみネットワーク

淡海  
2020  
112  
Summer

発行日/2020年8月1日  
発行所/公益財団法人 淡海文化振興財団

## 巻頭エッセイ●市民活動をサポート!

### 仲間と広げる 活動と活用の輪

ヨシ(葦)は冬期に刈り取ることで新しい芽の健康的な生長を助け、ヨシ原の活性化につながります。私たちコクヨ工業滋賀は、滋賀県に根差す企業として、ヨシ原の保全と新たな活用に事業として取り組み、琵琶湖の環境とヨシ原の大切さを広く地域に伝えることを目的に「リエデンプロジェクト」を2007年に発足しました。

プロジェクトでは、地域が一体となった活動へと発展させるため弊社が事務局となり、活動団体「ヨシでびわ湖を守るネットワーク」(現在131社が賛同)を2009年に立ち上げました。県内企業を中心に産学官が協働したヨシ刈りボランティアや外来魚駆除釣り大会に参加し、地域独自の環境課題の解決に関わり続けています。また、びわ湖・淀川水系のヨシを活用した文具「ReEDEN(リエデン)」シリーズを創出し、「刈る→作る→使う」のサイクルを回すことで持続可能な社会づくりに貢献しています。これからも生物多様性に富んだ美しい琵琶湖の原風景を次世代に受け継ぐため、活動と活用の輪を広げてまいります。

伊庭内湖ヨシ刈りボランティアの様子



株式会社コクヨ工業滋賀 開発グループ  
田中 沙季さん



Ohmi Network Center

淡海ネットワークセンター

公益財団法人 淡海文化振興財団



社会福祉



障害者支援



世間よし



地域支援



## おうみ未来塾 リレーエッセイ

### 楽しみながらの 活動はひとがあつまる

おうみ未来塾での学びをきっかけに、北海道でも特に寒さが厳しい森林の町へ移住し、現在は限界集落でコミュニティカフェを運営しています。

人口3,200人の小さな町。車で1時間走るとオホーツク海で、この冬はマイナス30度を経験しました。バナナで釘が打てるのは本当のこと。

この小さな町の魅力。新しい試みに挑戦するとき、誰もそれを否定せずやってみなよと応援してくれること。いわく「開拓の地だから、みな新しいことに抵抗がない」と。自身の活動が町全体によく響く。スピード感も心地よい。そして楽しみを楽しむ方法を知る人が芋づる式に現れ、好きなように手伝いそして去っていく。

おうみ未来塾では、子どもと保護者の気持ちに寄りそえる場所づくりを目指していました。計画段階から様々な壁にぶち当たりましたし、色々な事に臆病になりすぎ、前に進めなかったことも多々ありました。

現在は、カフェ運営のほか、ワークショップ活動にも力を入れています。出張床屋に来てもらったり、移動販売、ミニ図書館、町の木材でクラフトワーク、ZOOMを使って厨房から町内の子どもに向けて「大人の手を借りない料理教室」、みんなで畑を耕し収穫物を料理に使ったり販売したり、馬や羊を飼う計画もしています。

未来塾時代、仲間と温めつつも断念していったアイデアの種がふわりと飛び、遠く北海道で花開きました。

おうみ未来塾 第15期生「ごぞっと!」 細江美和子、  
下川町地域おこし協力隊(北海道)



## 分かちあえる手段。

## シェアしながら仕事を育てる

## 「サンキューファイブス夢プロジェクト」がみせてくれたもの

SNSなどでよく目にする言葉、「シェアする」。共有するという基本的な意味がありますが、現在はまさに、「シェアリング」の時代とも言えます。

今回訪ねた滋賀県聴覚障害者福祉協会びわこみみの里(以下、「みみの里」)では、「サンキューファイブス夢プロジェクト」の名のもと、複数の事業所(プロジェクトメンバー)とともに仕事を分かちあいながら、約10年にわたり「steed」というオリジナルバッグのブランドを育てていられました。このブランドが、なぜ今も成長し続けているのか。立ち上げの経緯から現在までを伺いました。

## ■サンキューファインホース 夢プロジェクト

「steed」というバッグのブランドをご存じでしょうか。馬や競馬のファンというコアなファンが中心だったこのブランドは、「みみの里」をはじめとする「サンキューファインホース夢プロジェクト」のオリジナルブランドで、着々とそのブランド力を付けています。

このバッグのブランドの始まりは、JRA 栗東トレーニングセンターで大量に廃棄される調教用ゼッケンを再利用して商品にできないかと、滋賀県下の障害福祉サービス事業所などに呼びかけがあったことから始まりました。

事業所として作りやすく、またゼッケンの形や数字をそのまま生かしたシンプルでおしゃれなバッグを「みみの里」が提案し採用され、ここから「サンキューファインホース夢プロジェクト」がスタートします。

まず、バッグができて上がる工程として、ゼッケンの選別、洗濯、テープはがし、裁断、縫製。これらの工程を分業できないかと、「みみの里」から声をかけ、洗濯は滋賀県草津市にある社会福祉法人「若竹会」が、ロゴデザインやシヨップカードは大津市の社会福祉法人「いしづみ会」、そして裁断、縫製、検品、包装、ネットの販売管理を「みみの里」と、少なくとも3施設が関わり、このバッグが世に出ることになります。その後、茨城県のJRA 美浦トレーニングセンターのゼッケンも利用することになり、美浦のゼッケンは茨城県の障害者施設「虹の里」が洗



◀縫製作業の様子。白い生地なので栗東所属の4歳馬だということがわかります。



様々な形のバッグたち。  
競馬にちなんだ名前がついています。▶

ことで別のものに生まれ変わらせること(の)の一面も持つ、「steed」の評価はますます高まるのではないのでしょうか。

## ■そして、これから

立ち上がりから今日まで、複数の福祉事業所がともに展開してきた「サンキューファインホース夢プロジェクト」ですが、普段から横のつながりがあるのかと聞いてみると、福祉事業所は自分のところで精一杯で横のつながりを持つ余裕がないのが現状ではないか、との答え。それでもこのプロジェクトをみると、一つの事業が分業化されているにも関わらず、互いがつながることで、事業が成長し継続しています。



また、お礼のメールなど、バッグを買った人からの反応や、メディアに紹介されることにより、自分たちはこの事業に携わっている、という自信や誇りが生まれることは、何ものにも代えがたいことではないのでしょうか。

もちろん、すべてが順調なわけではなく、素材となるゼッケンは汚れや破損が目立つものが多いため、何千枚のうち200枚程度しか使用できないので、需要が増えてもこの数しか製品化できないこと、また新アイテムの企画や販売の持続力、何より利用者のモチベーションや技術の継承などが、これからの課題のようです。

## ■新しい意識のなかで

今、私たちは新型コロナウイルス感染症のまん延により、今までにない体験をしています。そのなかで「誰かを応援する」という想いを具体的な行動に移していくことが私たち日本人のなかに生まれてきています。そのうえで環境問題への取り組みやSDGsの認識など、今までの大量消費や安ければよいといった価値観も変わってきています。

どこで作られ、誰が作っているかがわかり、「買う」という行動が誰かの応援、支援になっている。こうした意識の高まりは「steed」が抱える課題を解決する一つになるかもしれませんし、また福祉事業所とかなかなか接点がない人たちをつなげるきっかけも生むのではないのでしょうか。



## ■おわりに

利用者の賃金をアップしたい。その想いから始まった「サンキューファインホース夢プロジェクト」の取り組みを紹介しましたが、いかがでしたでしょうか。

できないことは誰かに助けをもらおう、そんなシンプルな行動が結果的に分かち合う手段となり、大きな広がりを見せていると、強く感じました。

ちょっと無理だからと言って事業そのものを諦める、そんなことはないでしょうか。まずは周りに声をかけて取り組んでみる。そんな分かち合う事業展開が当たり前の仕組みになってほしいと心から思う取材でした。



福祉事業所の枠を取っ払え!  
新しい施設のあり方のその先は

「障害があろうとなかろうと好きなことを仕事にして精一杯生きる」。それが今回伺った福祉事業所、BRAH=art.(ブラフアート)のコンセプト。その言葉通り、代表の岩原勇氣さんは今、福祉事業所の枠を超えて「やりたい、やってみたい」事業を次々と展開されています。それらの事業は一見、つながりがないようにみえますが、その根底にあるのは全ての人が住み続けたいまちづくり、障害がある人が当たり前前に居るまちづくりです。

そのために、今いる地域で自分たち福祉事業所は何かできるのか。福祉事業所の閉塞感を打破し、地域とwin-winの関係をつくるには、と考えたとき、支援される側ではなく支援する側になろうと参加し



▲子どもたちのイベントの様子

たのが地元商工会の主宰する「唐橋しじみ市with勢多市」でした。そこから月日を重ね、今は運営側となり、このイベントを支えるブラフアートは「そこにいて当たり前」な存在として、地域の底辺を支えます。他にも地域の子どもの学習支援や子どもカフェなど、「こっさて面白い、楽しい!」と、子どもたちが



▲音楽イベント、楽しそうですね

岩原さんは「足元を固めながらも、もう1つその先へ展開していきたい」と話しておられます。そのための新たな事業やイベントもすでに動き出しているようです。

福祉事業所の当たり前を次々と塗り替えるブラフアート。誰もがいて当たり前、ますますその活動が気になります!

特定非営利活動法人 **BRAH=art.** (ブラフアート)

- 代表 / 岩原勇氣
- 設立 / 2015年
- 連絡先 / 大津市一里山二丁目14-12-1-B  
TEL: 077-575-9952  
HP: <https://brahart20131.wixsite.com/mysite>



一人ひとりに合った  
体験教室を通し、みなが学びあう



▲設立当時に振り返る代表の福永さん (向かって左)

特定非営利活動法人滋賀自閉症研究会たんぼぼは、25年前に自閉症の子どもを持つお母さんたちの勉強会としてスタートしました。まだ自閉症が一般に認知されなかった時代に、まず自閉症を

知ってもらい、理解してもらおうための活動から始まり、自閉症の子どもたちと保護者の支え、受け皿として存在してきました。

活動としては、柱の一つであるセミナー事業は、時代とともに内容が変化する一方で、親子療育教室「たんぼぼクラブ」は、現在も内容を変えずに一人ひとりの特性に合わせ、保護者と支援者、子どもがともに活動し、学びあう全国でもめずらしい取り組みの教室となっています。その内容は、指示から子どもの行動を促すのではなく、子ども自身のタイミングで「考え、行動する」ことに重点を置いています。すると、どんな小さなことでも自分で達成できたという自信が付き、その結果、自然と自己肯定感が高まり、次々と意欲がわいてくるそうです。そして、それはあくまで「楽しく!」です。また、子どもだけでなく保護者や支援者の支援のスキルを上げるとともに、最も大切なことは保護者同士の交流の場として、悩みを解消したり、みな学びあう教室となっていることです。

このような事業を踏まえ、自閉症の人たちが、自分で選択して、やりたいことをやれるような世の中を目指し、新しい事業も取り入れながら活動を続けています。それには、様々な



▲みんなが楽しんでいる「たんぼぼクラブ」の様子。坊主めぐりをしています

特性を持つ自閉症の人たちを正しく理解すること、同じ社会を生きる者同士、まずは知ることから始めたいですね。

2020年度「げんさん食育NPO基金」助成団体

特定非営利活動法人 **滋賀自閉症研究会たんぼぼ**

- 代表 / 福永ナナ子
- 設立 / 2003年
- 連絡先 / 草津市若竹町2-8  
TEL: 077-575-3796  
HP: <http://npotanpopo.jimdo.com/>



社会貢献する

「世間よし」企業紹介



## 地元商店街とともに地域の活性化を 新しい宿泊のかたち



▲近江屋外観。他にも6棟あり併せて講大津百町といいます

デザインの内装家具が並び、町屋という日本家屋にもマッチし、その美しさにしばし見とれるくらいです。

このホテルは、竜王町にある谷口工務店とホテルの運営元である旅と食(文化)に特化した本の出版社(株)自遊人が、地域の活性化と、新しい旅のスタイルを提案するためにプロジェクトを組みスタートさせました。その内容をマネージャーの佐藤毅純さんに伺いました。

新しい旅の提案。それは、観光が目的ではなく滞在して街の文化を味わってもらうこと。例えば、食文化。隣接の商店街には湖国の食文化を伝える老舗や新規のお店が並ぶので、宿泊客の食事はそこを紹介し、現にホテルにレストランはありません。また、「ステイファンディング」という、一泊あたり150円が商店街に還元(寄付)されるユニークなシステムの導入や商店街ツアーなど、地域と連携して、新しい旅のスタイルを発信しています。

「大津には地域文化の深みがありますよ。東海道最後の宿場町らしく受け入れる対応力がある」と、佐藤さん。「インバウンドに左右されず日常があるこの商店街の姿も、また見直されるかもしれませんね」とも笑顔で語ってくださいました。今、あるもの



▲中に入ると外観と全く雰囲気が変わります

のが実は宝物。新しい旅のかたちを商店街とともに提案するHOTEL講大津百町。ようやく旅もできそうです。宿場町の文化を味わいにHOTEL講大津百町を訪ねてみませんか。

## HOTEL講大津百町(ホテルコウオツヒヤクマチ)

- 代表(マネージャー)／佐藤毅純
- オープン／2018年
- 連絡先／大津市中央1-2-6  
TEL:077-516-7475  
HP: <http://hotel-koo.com/>



社会福祉

チェ  
市民と企業のCha  
チャレ

滋賀県内  
NPO や社会貢献企業  
のチャレンジを

## みんな誰かの役に立ちたい 食を通して新しい居場所作りを

彦根の歴史を重ねた建物が残る一角。そのなかに今春オープンした「みんなの食堂」があります。明日のお弁当の仕込みの音を楽しみながら、プロデューサーの川崎敦子さんにお話を伺いました。



▲いろんな方が食材を持ってきてくれます。受け取る川崎さん

川崎さんは放課後児童クラブに始まり、生きづらい若者の支援にも携わるなか、誰ひとり支援されたいとは思っていないと実感し、だったらどんな場所で、どんな事をすればいいのかを考えるうちに思いついたのが、この「みんなの食堂」でした。ここでは、食材は市場に出せない食品を提供してもらうので食事をするだけで食品ロスの解消につながり、提供者は社会貢献ができる、また食堂を手伝うことで誰かの役に立つこともでき、自然と誰かの力になっているという循環型食堂ができあがりました。

また、ここには「恩送り券」というシステムがあり、これは食事代を払えない誰かの食事代をプレゼントするチケット。誰もが誰かの恩を受けていて、その恩を誰かに送る。そんな当たり前のようで、なかなかできないことがこのチケットでは可能です。現にチケットを使用した若者が食堂でボランティアをするなど、この恩送りもまた循環しています。

そんな「みんなの食堂」を軌道に乗せ、いろんな地域で広がってほしいと夢を膨らませる一方で、川崎さんは常に自分の行動が「助けている」という自己満足に陥っていないかと確認しています。それは長年、福祉の世界で培ってきた川崎さんの活動のベース。そこを踏まえて「みんなの食堂」は、今日も「誰かの役に立ちたい」気持ちで、ぐるぐると循環しています。ぜひ、一度訪れてみてはいかがでしょうか。きっと長居したくなりますよ。



▲「みんなの食堂」外観

## 循環型未来食堂 みんなの食堂

- プロデューサー／川崎敦子
- オープン／2020年3月
- 連絡先／彦根市河原1丁目2-7  
TEL:090-4287-7738  
HP: <https://minna5.com/work/minna-no-shokudo/>

# チェンジ Changeにチャレンジ! 応援BOX

市民活動を応援する淡海ネットワークセンターの  
事業をご紹介します。



募集

## ●寄付募集!!滋賀・コロナウイルス対策 困窮者支援基金のお知らせ

6/12より、47都道府県「新型コロナウイルス対策」地元  
基金～応援したい都道府県を選んで寄付できる～『47コ  
ロナ基金(よんなな・ころな・きぎん)』が、全国一斉に寄付募集を開始しまし  
た! (<https://congrant.com/jp/corona47/>)

その47都道府県のうち、【滋賀の基金】として、淡海ネットワークセン  
ターも新型コロナウイルス対策困窮者支援基金を設置します。

この基金は、滋賀県内で、新型コロナウイルス感染症の影響により厳  
しい状況に直面している方を支えるための基金です。新型コロナウイルス  
は、人々の暮らしに大きな影響をもたらしました。なかでも立場の弱い人  
は、さらなる困難に直面しています。

当基金へのご寄付は、生活困窮者やひとり親家庭等への食料支援、  
経済的に困難な状況にある人々へのケア、一人暮らしの高齢者の見守  
り活動、障がいのある方々への支援など、社会的に弱い立場にある人  
を守り応援する活動への支援に使わせていただきます。

どうぞ、より多くの方の寄付参加をお待ちしております。

【ご寄付はこちらから】

<https://congrant.com/project/sanaburi/1748>



募集

## ●公益財団法人淡海文化振興財団 賛助会員募集

淡海ネットワークセンターでは、当センターの目的  
に賛同し、事業運営にご協力いただける「賛助会  
員」を募集しています。年会費は個人1口3,000  
円、法人1口10,000円です。ご協力をよろしくお願  
いします。



※寄付に対する税制優遇措置

当財団への寄付は、税制優遇(寄付金控除/損益算入)の対象となります。



募集

## ●『おうみ良うなる!元気商品プロジェクト』 協力企業等募集中!

このプロジェクトは、企業等の商品やサービスの  
売上げの一部を未来ファンドおうみへ寄付してい  
ただき、おうみ(滋賀)の地域社会をもっと良くて  
いこうとするものです。

現在、寄付つき商品(おうみ良うなる!元気商  
品)の普及にご協力いただける企業・団体等を募  
集しています。詳しくは当財団ホームページをご覧  
ください。

※本プロジェクト参加団体(敬称略)

◇近江通商株式会社(高島市)商品名「近江里山の薪、近江里山の炭」

◇株式会社口ハス長浜(長浜市)商品名「山かぶドレッシング」

◇一般社団法人比良里山クラブ(大津市)

商品名「赤シソジュースHira ヒラ ペリラ」



2020年6月30日現在



お知  
らせ

## ●おうみ未来塾からのお知らせ

2020年5月に予定していました、おうみ未来塾第16期  
の募集は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点か  
ら、1年延期とさせていただきます。なお、募集開始は2021年6月頃を予  
定しています。

## 編集後記

■新型コロナウイルス感染症のまん延で、おうみネット112号は従来の7月1  
日発行を8月1日発行に変更いたしました。

■今号は、そもそも発行出来るのかと不安ではありましたが、取材先の皆様  
のご協力により無事発行することができました!本当にありがとうございました。  
取材先の皆様のエネルギーで情熱的な思いにふれ、あれもこれも伝えたい!  
と思うばかりでした。これからも「おうみネットだから伝えられること」を  
目標に、取材を重ねていきたいと思っております。(辻ゆかり)



淡海ネットワークセンターは、県内の市民活動、NPOをサポート・ネットワークしています。

■情報交流誌「おうみネット」は登録いただいている県内外の団体・個人のほか、次のところに配布しています。

(50音順)

関西みらい銀行、京都信用金庫、県内公民館、県内公立施設、県内市民活動支援センター、県内社会福祉協議会、県内市役所・役場、県内図書館、  
県内中学校・高校・大学、滋賀銀行、滋賀県信用組合、滋賀県庁、生活協同組合コープが、他

〒520-0801 大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2階  
TEL:077-524-8440 FAX:077-524-8442  
<https://www.ohmi-net.com>  
E-mail:office@ohmi-net.com  
開館日:○市民活動ふらっとルーム/火~土曜日(火~金曜日の祝日は休館)

淡海ネットワークセンターの  
HPは右記QRコードでご覧に  
なれます。セミナーやイベント  
情報も掲載しておりますので、  
ぜひご利用ください。



## 公益財団法人淡海文化振興財団 「未来ファンドおうみ」助成事業

滋賀県内で、地域や社会の課題解決やびわ湖等の環境保全に取り組むNPO・市民  
団体の活動に助成を行います。詳しくは下記ホームページをご覧ください。  
2021年度募集: 2020年12月(予定)

ホームページ <https://ohmi-net.com/jyosei/> TEL 077-524-8440



この印刷物は大豆油インキを包含した植物油インキを使用しています。